

アルフォンス・ドーデ作「最後の授業」をめぐって

安藤 重和

(国語教室)

の不行跡を深く後悔し、改心していく、という図式に於いて当作品を理解するのが一般的な読み取り方と思われるが、その点を先ず検討したい。作品冒頭を見よう。

①② その日の朝、僕は学校へ出かけるのがとても遅くなってしまった。叱られるのがたいそうこわかった。アメール先生には、皆に分詞についての質問をすと言われていた。ところが僕には、その方の勉強もまるでしてないので、なおのことだった。一瞬、学校なんかずる休みして、野原でも気ままに駆け回ろうかという考えが、僕には起った。

② とても暖かく、とてもよく晴れた日であった!

③ 森のはずれからは、鶯たちのさえずる声が聞こえていた。リペールさんとこの原っぱでは、製材所の裏手のあたりで、プロシア兵たちの訓練をしている物音が響いていた。そのどれもこれもが、分詞の規則なんかよりはるかに強く、僕の心をゆさぶっていた。でも僕は、やっとその誘惑にうちかった。そして全速力で、学校めがけて走り出した。

多言は無用であろう。①②③の段落で描写されている事柄は全て「ずる休み」への「誘惑」ばかりである。にも拘らず、「その誘惑

一
アルフォンス・ドーデ作「最後の授業」は原文はフランス語で書かれているが、松田穰氏訳・桜田佐氏訳・神宮輝夫氏訳その他の日本語訳が作られている。しかし、それらの日本語訳は、それぞれ出上の問題点を含んでおり、本学の谷口巖氏は桜田佐氏訳を重視されつつ「なお正確な原作の読み、また教材として納得できる細部の表現などを求め」て「みづから新しい訳を試み」られ、それを、新訳「最後の授業」として公表された。^①これが現時点における最も信頼度の高い日本語訳と思われ、以下、谷口氏訳に拠って、考察を進めたい。

二

本作品の副題に「アルザスの一少年が語ったこと」とある事で明らかかなように、「アルザスの一少年」即ち「フランス」少年の「語り」によってこの物語りが進行して行く形式を取っているのであるが、このフランス少年を、「授業を何度もする休みした」不真面目な少年と位置付け、その少年が「最後の授業」に接して自分の従来

にうちかつて、「しかも、いやいやの状態ではなくできるだけ遅れを取り戻そうと「全速力」で学校へ疾駆するフランツがいる。何故、フランツは数多の「誘惑」にうち勝つことができたのか。その理由は全く語られていないけれど、それは彼の「真面目さ」故としか考えられまい。不真面目な生徒がこれだけ多くの「誘惑」を前にしたら、間違いなく「ずる休み」に走りほしくないか。

次に、遅刻したフランツが教室に入っていく場面を見よう。

⑧ こういった（授業の始まりの時の）騒しさのすべてにまぎれて、こっそりと自分の席までたどり着けるよう、僕は期待していた。ところが、その日に限ってどうだろう、まったくしんと静まりかえっている。何だか日曜日の朝のようであった。開けられた窓からは、友だちがみな、もうきちんと並んで席に着き、アメール先生が、おっかない鉄の物差を小脇にかかえたまま、行ったり来たりしているのが見えた。僕がドアを開けて入って行かなければならなかったのは、そんな静けさのまったただ中だ。おわかりでしょう。僕がどんなに顔を赤らめ、こわさでふるえていたことか。

アメール先生が持っている「鉄の物差」が「おっかない」のは今までにこの「物差で何度もぶたれた」(⑭段落)ことがあるからであり、「こわさでふるえ」るほどの恐怖心ここで襲われているのも、教室へ入って行けば遅刻の「罰」により「鉄の物差」でぶたれることを具体的に予見しているからである。遅刻者にとって、いつもより格段に入って行きづらくなっている教室、しかも、その教室には恐ろしい「鉄の物差」が待ち構えている、と思念した時、フランツが不真面目な生徒であれば、授業へ出ることをやめ、「ずる休み」をすべく、ドアの前でユーターンしてしまうのではないか。登

校途上彼を「ずる休み」へと「誘惑」していた諸条件は依然として有効性を失っていない。だが、フランツは、これほど教室に入りづらい状況の中を、宿題の「分詞の勉強」もまるでしていないという負い目を抱え、遅刻の「罰」として「鉄の物指」でぶたれることを覚悟し「こわさでふるえ」ながらも、「ドアを開けて（教室へ）入って行かなければならない」という考えを放棄することなく、教室へ入って行く。この彼の真面目さは並みの真面目さではない。これだけ、彼にとっての悪条件が重なりながら、なお授業を受けようとするフランツは実は相当真面目な生徒と考えてよからう。

しかし、その日が「フランス語の勉強の最後の日」であることをアメール先生に知らされた直後、彼は従来の自分の態度について次のように言及している。

⑭（略）無駄に過ごした時間のことを、僕はこの時、どんなに後悔しただろう。授業を何度もずる休みしたその足で、僕は鳥の巣を探し回ったり、ザール川の氷滑りにも行った！ 本だって、つい今しがたまであんなに嫌で、持つのも重く思えたものが（略）

フランツは「授業を何度もずる休みした」ことがあるという。ここに語られるフランツは不真面目そのものの少年ではないか。「ずる休み」への「誘惑」にうち勝った前述の真面目なフランツ少年とは直ちには結びつかない。フランツ少年の造形に關し、作品内の矛盾があるかとさえ思われるほどであるが、ここでそう断定してしまわないで、根は真面目なフランツが何故不真面目な行動を「何度も」繰り返したのかについて、もう少し考察を続けたい。

彼の不真面目さが、「授業」関係で発揮されていることに注意したい。そうすると思いがたることがある。アメール先生の次の言葉

に着目しよう。

⑱ 「(略) そういう私だって、反省の必要がまったくないなどと言えるでしょうか？ 君たちに勉強させるかわりに、何度も、うちの花壇に水をまかせたりはしなかったでしょう？ また、自分が鱒釣りに行きたい時には、いつも平気で、授業を休みにしたのではないのでしょうか？……」

アメール先生の授業軽視は歴然としている。教育に「あまり熱心で」なく子供達を「臍や紡績工場へ働きに出して、少しでも余計にお金を手に入れよう、と考え」る土地柄においては、特に教師こそ授業軽視の風潮に逆らい教育を守るべきであるのに、アメール先生は堂々と授業軽視をやっていたのである。教育不熱心な地域で、授業軽視の教師に受け持たれたのでは、相当真面目な生徒でも何度も「授業をずる休み」してしまうことは有り得るのではないかと？ 小学生に対する担任教師の影響の大きさについては、ここで改めて言うまでもあるまい。フランツの「ずる休み」の背景には、アメール先生の授業軽視の姿勢が大きく関与していると考えざるを得ない。このアメール先生は「最後の授業」の前日まではフランツ達に対し全力投球で授業をしたことがあったかどうか疑わしい。「最後の授業」の有様を語るフランツの言葉に注意しよう。

⑲ (略) 続けて先生は、文法の本を手に取り、今日の勉強のところを読んでくれた。驚いたことに、それは僕にもたいそうよくわかった。先生の言っていることはみな、やさしいやさしいことばかりと思われた。これまで僕が、こんなに一生懸命聞いたこともなかったし、それに先生が、こんなに辛抱強く説明してくれたことも、またなかったと思う。(略)

最後の文法の授業が、驚くほどよく理解できたのは、フランツの

側が今までにないほど「一生懸命聞いた」からばかりではなく、アメール先生がかつてないほど「辛抱強く説明してくれた」からであるという。今までフランツが「文法」の授業をよく理解できなかった原因の一半はアメール先生の授業展開にもあったと言えそうである。

考えて見れば、フランツが根は真面目な生徒であることは、その日が「フランス語の勉強の最後の日」であることを知らされた途端、それまでに「授業を何度もずる休みした」ことなどを深く後悔し残されたわずかな授業時間の中で少しでも多くの事柄を学習すべく必死になるところからも知られよう。

だから、「最後の授業」の日に、従来不真面目であったフランツが心を入れ替えて真面目になったと読むべきでなく、根は真面目なフランツも周囲の教育軽視・授業軽視の風潮に流され何度も「ずる休み」をすることもあったけれど、「最後の授業」の日にそのような自己の側面を深く反省し、本来の真面目さを取り戻した、と読むべきではないかと思う。

三

さて、フランツの人間像を検討する過程で、アメール先生の言動に問題点が含まれていたことがわかって来た。従来、アメール先生の言動を賛美しアメール先生を神格化する読みが一般的であったように思うが、どうやらもう一度検討してみる必要があるであろう。さて、「最後の授業」という作品の初出は、谷口氏に拠れば、一八七二年六月十三日付のパリの新聞、「レベエヌマン」紙上であったということであるが、谷口氏は更に、この作品の描写内容を細かく検討され、この作品中に設定されている「時」に関し、「物語中

の年だけでなく、季節までもまた、新聞発表の時期にあわせた、八現在Vの出来事として、一致させられている」という実に重要な事実を明らかにされた上で、更に次のように論を進めておられる。

戦後（普仏戦争後—安藤注）の講和条約によって、アルザスがドイツの所領となったのは前年、一八七一年の五月からのことであり、プロシア兵たちの駐屯はその前後から始まっていたが、アメール先生の学校ではなお一年近く、フランス語の授業も許されていたと、考えておいてよからう。母国から切り離された痛みの中で、必死にフランス語を手離すまいと自覚すれば、一年の間にも相当に学び得たはずのものを、漫然と日を暮らして、突然の「最後の授業」の知らせに、フランスも村人たちも驚いている。

③ 普仏戦争の経過を極く大まかにふり返っておくと、次のようになる。

一八七〇年八月初め

開戦

八月六日

アルザス北部のフレイシユウイラーと、ザール方面のフォルバッハで仏軍大敗

八月七日

パリに戒厳令発布

八月月中

アルザスの大半を普軍に占領される。

九月二日

セダンで包囲されたナポレオン三世降伏。その後も戦争は続いたが副次的な意味しか持たず。

意味しか持たず。

一八七一年一月二八日

休戦協定締結

二月二六日

ヴェルサイユで仮講和条約締結

五月一〇日

フランクフルトで正式講和条約締結

谷口氏が「一八七一年の五月」と言われたのは正式講和条約締結の

時期を言われたのであるが、「フランスがアルザス・ロレーヌ地方をプロシアに割譲する」という条件は、「フランスがプロシアに吾億フランの賠償金を支払う」「プロシア軍のバリ入城を認める」などの条件とともに、既に二月二六日の仮講和条約の条項に含まれていたことであり、この段階で、アルザス地方においてフランス語の授業をいつまで続けることができるか疑問に思う人がいても不思議はなかったと思うのであるが、フランスや村人たちはフランス語の授業が禁止されることがあるうなどは夢にも考えなかったらしい。不思議な気もするが、一面無理もないかとも思う。教育にあまり熱心ではない土地柄では、村人たちにとって、フランス語の授業のことより、フランス領からプロシア領へと変更され周囲の状況が種々激変してしまったアルザスにおいて日々の生活を如何に守って行くかの方が重要なことであつたらうし、又、フランスなどの子供達に、政治情勢の変化とフランス語の授業存続の問題を関連付けて考えさせようとする方が無理なのかも知れない。

だが、アメール先生はどうか。前年二月二六日にアルザスをプロシア領とすることが合意され、同年五月一〇日からアルザスが正式にプロシア領となり、プロシア兵の姿を間近に見て暮らすようになっていくのに、フランス語の教師でありながらなお、フランス語の授業が禁止される日が来ようなどは、夢想だにし得なかつたというのであろうか。そこまで間抜けな教師であつたのか？ いや、決してそうではなかつた。次の文章に注意しよう。

②⑩ その時間が終ると、次は書き方の勉強だつた。この日のために、アメール先生は、まったく新しい手本をたくさん、僕たちに用意していた。そこには、丸味のあるきれいな字体で、フランス、アルザス、フランス、アルザスVと書かれていた。(略)

「この日のために」「用意していた」という表現は、ベルリンからの命令で突然フランス語の授業が禁止されることになり、大急ぎで手本を用意した、という意味では恐らくなからう。彼は、「この日」が訪れることを予想し、「この日のために」あらかじめ「新しい手本をたくさん」書くという具体的準備をしていたらしいのである。だが、彼が「この日」が訪れるであろうことを予見し得た段階でまっ先に為すべきことは、漫然と日を送っている生徒達にフランス語の授業がいつ禁止になるかわからない旨を伝え、生徒達の注意を喚起し、残された授業時間を少しでも充実させることではなかったのか。そうすれば、残された授業時間を生徒達は必死になって勉強したのであることは、「最後の授業」当日の生徒達の必死の学習態度からも明らかであろう。アルザスがプロシア領になってしまったからフランス語の授業は不要であるなどと考えている生徒は、アメール先生の学校には一人もいないのである。であるのに、アメール先生はその肝腎の事をしなかった。

その代わりにアメール先生がしたことは、ハフランス、アルザス、フランス、アルザスVという、フランスとアルザスの関係を強調した習字の手本を「たくさん」用意することであった。現実にはプロシア領となつて既に一年の歳月が経過している土地において、なお、アメール先生は「アルザス」に対し「フランス」であることを求めているのである。だが、その「アルザス」をプロシアに割譲したのは他ならぬ「フランス」であつたのではないか。

又、次の部分にも注意したい。

⑲ それから、アメール先生は、僕たちに対して、フランス語についての話、矢つぎばやに始めた。フランス語は、世界で一番美しく、一番わかりやすく、一番しっかりした言語である。

私たちはフランス語を、たがいに守りぬき、決して忘れたりしてはならない。なぜなら、たとえある国民が奴隷の運命に落ちようとも、その国語さえしっかりと手放さずにいれば、それこそ、自分の入れられている牢獄の、鍵を握っているようなものである。こんなことを、先生は話したのであつた……(略)

この作品の心臓部とも言うべき重要部分であるが、一般には、この「アメール先生の台詞を、ハ国語愛Vの真情に出たものとしてとらえ、それをフランス語からハ日本語Vの世界へと転用して、おおいに国語へのハ関心Vやハ感謝Vの念を持つよう訴えかける」授業が展開されていること、谷口氏の言われる通りである。だが、アメール先生がここで主張していることは「国語愛」と言えることなのか。「国語愛」とは、世界中に存在する様々な国民が各々その母国語に対して抱く愛情、を言うのであり、本来普遍性を有する言葉ではないかと思う。「国語愛」の精神に沿えば、それぞれの国の言葉はそれぞれの国の民にとって、かけがえない値打ちを持つはずのものであり、世界中の言語の中で一番秀れた言語はどここの国の言葉であるかなどという発想とは無縁であろうはずなのに、アメール先生は、フランス語を世界一の言語であると盛んに強調している。これは「国語愛」というより単なる「フランス語愛」なのではなからうか。

又、アメール先生は、「ある国民が奴隷の運命に落ちる」とか「自分の入れられている牢獄」とかいう表現を用いているが、それが、アルザスがプロシア領となつている現状を指して使われていることは明白であろう。つまり、アメール先生はアルザスがフランス領でなくなつていいる現状を徹底して否定的に見ているのである。彼にとつて、アルザス地方の幸せはフランス領復帰以外にはない。故に、プロシア国民としてアルザスの民が同化して行く方向で作用す

るはずのドイツ語学習の意義など一言も口にし得ない。ドイツ語などいくら学習しても「牢獄」を脱出する為には何の役にも立たない、彼はそう思っているらしい。アメール先生にとって、現状プロシア国民となっっているアルザスの人々が、その国語たるドイツ語に愛着を感じること即ち、プロシアの民としての「国語愛」には積極的意義を見出せず、旧国語たるフランス語を手放さぬことのみが意味を持つのである。つまり、現国語に対する愛は評価されず、旧国語に対する愛のみ頻りに強調されるのである。名前などからして恐らくフランス人であろうと推定されるアメール先生にとって、フランス語はまぎれもなく「国語」であろうから、彼がフランス語に注ぐ愛情を「国語愛」と表現して間違いではないが、その内容は結局のところ「フランス語愛」でしかなく、敢えて言えば、排他的「国語愛」であって、決して普遍的「国語愛」ではないことを肝に銘じておくべきであろう。だから、実際の授業でこの教材を用いて「日本語愛」を説けば、「日本語のみ」を重視する排他的側面が必然的に付随してしまふと思う。世界各国の言語の価値を認めさせつつ、日本語の価値を認識させるというのであれば、教師が別途補助教材等で補足せざるを得まい。

さて、「フランス語愛」に燃えるアメール先生がフランス語の価値のみを強調し、明日から早速始まるドイツ語の授業の価値を全く説かなかつたことにより、生徒らは明日からのドイツ語の授業を積極的にとらえることができないままでいる。

⑳ (略) 学校の屋根の上では、何羽かの鳩が、低い声でかすかにクークーと鳴いていた。その声を耳にしながらか、僕は心でこんなことを思っていた。「今に鳩までも、ドイツ語で鳴かねばならぬ日が、やってくるのではないかしら？」

「鳩までも」とは「人間は勿論」という意味を前提とする。「ドイツ語で鳴かねばならぬ」というのはプロシア政府によってそれが強制されるということを考えての表現であろう。つまり、少くともフランス少年にとって、ドイツ語とは強制されて止むを得ず学ぶ言語でしかないのである。恐らく他の生徒達のドイツ語観も似たようなものであったのではないか。フランスのドイツ語観のみが特に異質であるように書かれていない。この調子では生徒達は明日からのドイツ語の授業をボイコットしかねないではないか。明日から生徒らが受けねばならぬドイツ語の授業に少しでもスムーズに生徒らが順応できるようにという教育的な配慮など、アメール先生の頭の中から美事なまでに欠落している。教育者としてこれであるのだろうか。

次に、「最後の授業」の最終場面を見よう。

㉓ 突然、教会の大時計が十二時を打ち、続いてアンジェラスの鐘が鳴り渡った。同時に、訓練から帰って来たプロシア兵たちのラッパの音が、教室の窓の下から響いた……アメール先生は教壇に立ち上った。顔はまっさおだった。この時ほど、先生の姿が、大きく見えたことはなかった。

㉔ 「皆さん」と、先生は言った。「皆さん、私は……私は……」

㉕ しかし、何かのどにつまんで、声にならなかつた。先生は、その言葉を、最後まで言うことができなかった。

㉖ すると、先生は黒板の方へ向きを変え、一本のチョークを手にとった。そして、そのチョークに全身の力をこめて、書けるだけの大きさで、字を書いた。

「フランス、ばんざい！」

㉗ そしてそのまま、先生はそこから動かなかつた。頭は壁にも

たせかけていた。もう言葉はなかった。ただ片方の手だけが、僕たちに向かって合図をしていた。

「おしまいだ…… お帰り。」

教師も生徒も更には村人達までもが一体となって必死になってフランス語に取り組んだ「最後の授業」は終わった。「四〇年も前から」この学校で教え続けて来たアメール先生の教師生活の、アルザスにおける最後の瞬間でもあった。「この時ほど、先生の姿が大きく見えたことはなかった」というフランス人は、今までにないほど完全にアメール先生に私淑しきついている。そのアメール先生が、黒板に「書けるだけの大きさで」、「フランス、ばんざい！」と書いた時、生徒達の一人残らずが、いや、村人達をも含めて教室内の全員が、一様に心の中で「フランス、ばんざい！」を叫び、大いなる感動のうちに「フランスへの祖国愛」を完成させたはずである。そう、既にプロシア領となっているアルザスにおいて、そのプロシアには背を向けて！

何故、「フランス、ばんざい！」なのか？ 「書き方」の手本にはハフランス、アルザス、フランス、アルザスと書かれていたではないか。最後の重要な瞬間に、「アルザス」の文字を消し去り「フランス」の文字のみを残した彼、そこには彼の考え方が究極的には「アルザス本位」ではなく「フランス本位」であったことが表われているように思う。

フランス語の価値のみを強調しドイツ語の価値には一顧だにしない彼、アルザスがプロシア領となっている現状を「牢獄」に入れられている状態と決めつけ、フランス領復帰以外にはアルザスの幸せはないと考える彼、アルザスがプロシア領となったのはフランスが普仏戦争に敗れトカゲの尻尾切りの形でプロシアに譲り渡したから

であるのに、それでもなお、アルザスにフランスに対する祖国愛を求め続ける彼、そこにはフランス本位の物の考え方が明瞭に見えて来よう。このようにアメール先生を造形してしまったところにはフランス人作者たるアルフォンス・ドーデの限界が感じられるが、プロシア領に住みながら、フランスに対する祖国愛を強固に確立させられてしまった生徒達や村人達は、この先どう生きて行くのである。アメール先生の授業を聞き、「今に鳩までも、ドイツ語で鳴かねばならぬ日が、やってくるのではないかしら」と悲観しているフランス少年はフランスに顔を向け、自分の住むプロシアに背を向けているのだ。

四

「最後の授業」という作品は、授業を軽視していると取り返しのつかない事態にたち至る時があるということを具体的に警告する時とか、たとえ排他的な形であるにしても自国語の重要性を具体的に認識させる時とかには驚くほどの効果を発揮するので、教育現場では或る意味で重宝な作品であるけれど、道徳教材としてではなく国語教材として、細部にわたる読みを試みる場合、従来の読み取り方には様々な問題点があったように思う。今回は、フランス少年像とアメール先生像を読み改めつつ、作品に内在する主要な問題点を考察してみた。特に、従来神格化されがちであった主人公アメール先生像の吟味には意を用いたつもりであるが、的はずれな発言も多いかと思う。御指導を乞う次第である。

(昭和六十三年九月十二日 受理)

注

- (1) 谷口巖氏「環境・風土からとらえる教材分析——『最後の授業』(アルフォンス・ドーデ作)」(国語科教育全書三八『文学教材分析の観点と実際』明治図書出版 昭五四・八 一一三頁～一三八頁)の中に、新訳「最後の授業」並びにその研究が収められている。以下引用するところの谷口氏の御説は全てこれに拠る。
- (2) 谷口巖氏の、新訳「最後の授業」には原作の形式段落に忠実に段落分けがされ、各段落に段落番号が付されているが、その段落番号を、以下、主としてこの形式で示し、引用文の所在を明示する。
- (3) 井上幸治氏責任編集・中公パックス『世界の歴史 二一—ブルジョワの世紀』(中央公論社 昭四四・一) 四八〇頁～四八二頁に拠り要約して示す。
- (4) アルザス地方の歴史的・文化的現実とは、「国境に近く位置するこの地方は、歴史的・文化的にみる時、かなり特殊な(現在はフランスの)一地方なのである。歴史的には民族移動と戦争の十字路にあたったこの地方は、(略)風土的・文化的にもドイツの性格……く持つ、ハヌエV的な土地なのである。たとえば、焦点を言語……題にしれば、この地方では今でもかなりの人が、フランス語まじりのゲルマン語系方言を用いているし、新聞すらドイツ語のものが見られるという」と谷口氏が指摘される通りであるのに、この作品中では、アメール先生が、「今となつては、私たちは、向こうの連中にこう言われても仕方がありません。何てことだ! お前たちはみんなフランス人だと言いつ張っていたじゃないか。それなのに、自分の国の言葉を、まともに話すことも書くこともできないなんて! ……」と発言しているのを初めとして、終始、アルザス地方が「みんなフランス人だと言いつ張っていた」土地柄として描写されてしまふところにも、フランス人作者たるドーデの限界が感じられること勿論である。端的に言えば、この作品は、フランス本位の幻想の上に成り立ったフランス人好みの作品なのであろう。この作品が「パ

リの新聞誌上」に発表された所以である。